

Clipping compound の構造

| | |
|-----|---|
| 著者 | 近藤 清兄 |
| 雑誌名 | 東北大学言語学論集 |
| 号 | 1 |
| ページ | 89-96 |
| 発行年 | 1992-03-25 |
| URL | http://hdl.handle.net/10097/00128006 |

Clipping compound の構造

近藤 清兄

キーワード：クリッピング 引き抜き 刈り込み ともぐい整備 反切複合

目次

- 0 はじめに
- 1 略語の分類
- 2 略語を用いた造語法
- 3 むすびにかえて
- 参考文献
- 付録

0 はじめに

タイトルにclipping compoundとあるのは、クリッピングその他の略語を、後述する「のりづけ」により接合してつくる合成語のことである。本論文では略語の中でも特にクリッピング、そしてその分類に力点をおき、そこからさらに接合のしくみを詳しくみてゆく。

さて、本論の動機は、辞書の記述の精密化を図るその一環として、現代の言語生活の中で大きな領域を占める略語と合成語の構造を調べようというものであった。将来において筆者のめざすところは略語辞典の編纂である。本論はそのための手順を考える出発点となる。

語義と語源は同じものではない。略語のよってきたところのものと語は、しばしばその略語とは意味を異にする。タブー、比喩、婉曲、企図の秘匿 (secrecy)、その他さまざまな意味論的・社会言語学的要因がそこにはある。本論の扱うところは語彙論的現象であるが、必要に応じそれら諸要因についても触れてゆくことにしよう。

1 略語の分類

従来「省略」abbreviationとかcontractionと呼ばれてきたものは、実はレベルの異なる

る雑多な現象の寄せ集めである。このうち文法的現象（音便、エリジオン、アポコープなど）を除いて、「略語」と呼び得るものを挙げれば、筆者の分類によると主なものは次の通りである：

(a) clipping クリッピング：語の途中を切ること、また切ったもの。

protomy プロトミー：前部を切り除く。

mesotomy メソトミー：中間を切り除く。

epitomy エピトミー：尾部を切り除く。

amphitomy アンフィトミー：両側を切り落とす（プロトミーとエピトミーがひとつの語について同時に起こる）

(b) #yanking 引き抜き：連語のうちのひとつまたはいくつかを取り出して代表させるもの。

(c) acronym 頭文字取り（本論では扱わない）

（#：筆者の用語、以下同じ）

さらに、クリッピングと関わりの深い現象がいくつかあるが、ここでは次のひとつを挙げるにとどめ、他は次章に回そう。

#makeweight おまけ：もともとないものをクリッピングにつけくわえること。

例を挙げる前にクリッピングのいくつかの特徴について述べておこう：

(イ) 語の内部で起こる。従って連語の中からいくつかを取り出すようなものはクリッピングではない。我々はここでそれを引き抜きと呼ぶことにした（The United Statesを単にthe Statesと呼び、physical checkupsをphysicalというがごとき）。引き抜きについては本論では詳しくは扱わない。

(ロ) 語のおかれた環境と関係がない。従って、フランス語のエリジオンや、母音連続を避けるための脱落などはクリッピングとはいえない。

だがイタリア語のun po' (<un poco) におけるpo'は環境と関わりがないので、クリッピングと見てよい。

(ハ) 音韻変化や文法上の変化、交替とは関係がない。従って組織的ではなく予言性もない。

(ニ) そこで完結している。従って発話を途中でやめる（吃り、躊躇など）ごときは当然クリッピングのうちに入らない。

プロトミーの例：

ムシヨ<刑務所

ホーム<プラットホーム；ただし「党綱領」の意で略形を使うことはない。

バックレる<しらばっくれる；ただし略形の意味は「逃げる・ずらかる、（無断で）欠席・欠勤する、すっばかす」に近い。

「こうなりやおもいっきりヤローからバックレっきゃねー！！」

加瀬あつし『カメレオン』

bus<omnibus

roach<cockroach

ナベ[人名]<渡辺

ギバ(ちゃん)[人名]<柳葉(敏郎)

メソトミーの例：

Frisco<San Francisco (引き抜きまたはプロトミーの後で)

エピトミーの例：

pop<popular

cop<copper [銅のバッジから。意味論的にはシネグドック(提喻)]

Gee!<Jesus! [意味論的には婉曲語法]；My!は引き抜き(<My Lord! etc.)。

lab<laboratory

サンド<サンドイッチ

メンテ<メンテナンス

アンフィトミーの例：

frig(fridge)<refrigerator

Ron[人名]<Veronica

Gus[人名]<Augustus

おまけの例：

パ二カー<パトカー [加瀬あつし『カメレオン』]；切ったのはよいが、*パカーではゴロが悪かったのか。

おんも<おもて [幼児語]

英語では-oや-y(-ie)をつけるものがよくある：

mando<mandarin (orange) [オーストラリア口語]

Ernie[人名]<Ernest

2 略語を用いた造語法

Clipping compoundの説明に必要な概念を挙げていこう：

#pasting のりづけ：クリッピング、頭文字、「フルワード」などを接合すること、また接合して得られた新語。

amalgam アマルガム：「接合面」に「交わり」のあるのりづけ。

#hansetsu compound 反切（複合）：接合面の左方が声母、右方が韻母になっているのりづけ。

#trim 刈り込み：クリッピングをさらに詰めて微調整すること。

#cannibalization ともぐい整備：同等の別語に取り替えること。

これらの構成に関連してさらにいくつかの概念を導入しておかねばならない。

#opening 創：語を切った傷口。引き抜きは基本的にフルワードなのでこれがない。

#interface 接合面：のりづけの境界。

#meet 交わり（のりしろ）：接合面の重複部分。アマルガムにはこれがある。

#full word フルワード：切っていない語。創がない。

では例を挙げてコンパウンドの実際をみていこう。

のりづけの例：

エピ+エピ：ファミコン<ファミリーコンピュータ

パンスト<パンティストッキング

セクハラ<セクシャルハラスメント

トラメガ<トランジスタメガホン

parsec<parallax second

PSYOP<psychological operations

Korsel（韓国）<Korea Selatan（朝鮮←南の）〔インドネシア語〕

エピ+プロ：racon<radar beacon（radar自体は頭文字取り）

バラドル<バラエティ+アイドル

エピ+フルワード：Enersave（省エネ）<energy+save〔カナダのスローガン〕

オムライス<オムレツ+ライス

※「チキンライス」はフル+フル（だが、フル「ワード」とはいいながら、これらは実は自立形式ではないのである）。

フル+エピ：朝シャン<朝+シャンプー

フル+プロ: jazzercise < jazz exercise

メソ+アンフィ: chortle (高らかに笑う(歌う)) < chuckle+snort

[Carroll, Lewisの造語]; メソにアンフィがはまり込んでいる。

アマルガムの例(下線部がのりしろ):

radome < radar plus dome

urinalysis < *urino-analysis

フラッpター < フラップ(ばたばたする) + オーニソプター(はばたき飛行機)

[映画『天空の城ラピュタ』1986]

いわゆるhaplologyにはアマルガムの特殊場合が含まれる:

morphonology < morpho-phonology

sexcursion (買春ツアー) < sex+excursion

「ユンケルンバでガンバルンバ」; [CM] 前者は「ユンケル[商品名]・ルンバ」の
つもり、後者は単なる地口である。

どこも切れていないかに見えるのがhaplologyの特徴である。

反切の例:

Muppet < marionette+puppet

mook < magazine+book

smog < smoke+fog

bit < binary digit

「カバン語」にはアマルガムのほかにこれが多い(snark < snail+shark)。

刈り込みの例:

ウッチャン[人名] < 内村(光良); 促音便。*ウチチャンではゴロが悪かった。

※同様に「ウッチャンナンチャン」を「ウンナン」とするのは、

*「ウッナン」では発音しがたいので逆行同化したのである。

オフコン < オフィスコンピュータ; モーラ単位で切れば*オフィコンのはずであった。

フィはまだなじみにくく、さりとてヒでは古くさかった。フとすることでfの
感じを残すことができた。

イタカジ < イタリアン・カジュアル; *イタカジュではゴロが悪かった。そこでさら

に文字単位で切った（カナはモーラ文字だが拗音は例外）。

ともぐい整備の例：

Minipax<Ministry of Peace [Orwell,G."Nineteen Eighty-Four"]

（エピとののりづけ；peaceにあたるラテン語をもってきた）

ゲンチャリ<原（動機）付自転車（「チャリンコ」のエピと取り替えた）

パパなつく〔ドラマ〕『パパとなっちゃん』（TBS系）；*「パパなっ」では発音しがたいので、ヒロインの名「夏実」の「なつ」に戻したのである。

〔ラジオ番組「大江千里のオールナイトニッポン」、91年6月12日〕

3 むすびにかえて

クリッピング・コンパウンドの理論は今出発したばかりであるので、境界例の判定など、多くの微妙な問題を抱えている。

頭文字取りの定義の問題とも関連してくる。漢字・カナを一文字ずつ取り出すのは頭文字取りなのか（そうとしても我々のエピトミーの定義をも同時に満たすのは事実である）。

切る側の態度も問題となる。接辞や語源を意識して切る、いわば学者切りと、おかまいなしに好きなところで切る、いわば平俗切りとでダブルレットをなすことがある：

porno~porn「ポルノ」

外来語についていうと、略語を借用したのか、借用語を略したのか、という問題もある（「ゴルビー」は前者。Gorbachevのエピ+*-y*からGorbyをつくったわけだが、この人物を我々はもともとロシア語風に「ゴルバチョフ」と呼びならわしていたので、Gorbyが英語のニックネームであるにもかかわらず、これを借り入れる際に「ゴビー」とはしなかった）。

略語の中でしか出てこないクリッピングもあり、ふだんからあるものをのりづけするのとは違う。

略語の成り立ちについて説の対立もある。その解決自体はここで扱う範囲を越えるが、少なくともここに挙げた概念をもって表現し得る。たとえばсамбо「サンボ（ソ連の格闘技）」の語源はсамозащита без оружияであるという（一般に知られる）説と、単にсамозащитаの略であるという理解（例えばビクトル古賀監修『これがサンボだ！』ベースボールマガジン社刊）とがあり、前者はここでの分類によればエピトミーと頭文字とののりづけと理解され、後者の場合は（引き抜きの後の）単なるエピトミーであり、そのさい-б-は語中音添加であるのでおまけである。

クリッピングかフルワードかを判定したく思っても、創は目に見えないため一般には検

証しようがないということもある。しかしながら創という概念の導入それ自体が無益というわけではあるまい。

「お妾」から「おめか」をつくるのはエピトミーであるが、「めかけ」が「おめかけ」のプロトミーであるなどというがごとき“相対化”が無意味でばかげたものであることは容易にわかる。これは「フルワード」と「創」の概念と関連する、ごくわかりやすい例である。

こうした問題を含め、今後考えてゆかねばならないことは多い。

なお、本論は、平成3年度言語学演習(中村完教授・千種眞一助教授・後藤齊助教授)において、後に日本言語学会第103回大会(91年10月27日、於・南山大学、名古屋市)において発表された同名の報告に若干の補充と訂正とを加えたものである。発表の前後には多くの方々のコメント・事例提供をいただいた。ここに謝意を表し本論を結ぶ。

参考文献

- 小鷹信光(1990): 和英ボルノ用語事典、講談社。
坂下昇(1984): 現代米語慣用句コーパス辞典、講談社現代新書。
ギー・ジャン・フォルグ/松野訳(1986): 米語の語彙、白水社。
アンリ・ミッテラン/内海、神沢共訳(1984): 改訳フランス語の語彙、白水社。
森沢亀鶴(1984): 英和・和英米軍用語辞典、学陽書房。
陸上幕僚監部(1980): 軍事英語ハンドブック、学陽書房。
- Jonathon Green(1984): The Dictionary of Contemporary Slang, Pan Books, London.
Thomas E. Murray & Thomas R. Murrell(1989): The Language of Sadomasochism,
Greenwood Press, Westport, Connecticut.

付録

(1) にセクリッピングとにセ頭文字の数々

a つづりだけ

Li'l Jinx < little [漫画のヒロイン]

H'lo! < Hello!

C'mon! < Come on!

Cap'n Crunch < Captain [商品名]

b 訓読みするもの

vs(against) < versus

Jpn < Japan

etc.(and so on) < et caetera

int'l < international

c じつはクリッピング

ID < identification

d じつは文だった

I.O.U.「借用書」 < "I owe you"

e フルワードをもじった

Q8 < Kuwait [クウェートの石油公社のブランド]

(2) オーウェルの「オセアニア」

The name of every organization, or body of people, or doctrine, or country, or institution, or public building, was invariably cut down into the familiar shape; that is, a single easily pronounced word with the smallest number of syllables that would preserve the original derivation.

"Nineteen Eighty-Four" (1948), appendix

(Penguin Books, p.247)

(東北大学大学院生)